

JACT 誌 5 卷 060510

「相補・代替・伝統医療と統合医療」

東京女子医科大学名誉教授

阿岸鉄三

われわれの身の回りには、一方で相補・代替・伝統医療に、もう一方では統合医療に興味を持つ人たちがいます。しかし残念ながら、日本の医療界ではこれらに対する理解・認識がいまだ一般的とはいえません。これらは、現在一般的に広く臨床応用されている現代科学的医療に対峙するもののような感じすらあります。これらの3つの医療領域・医療概念の関係について、わたしは次のように理解しています。

人間が種として独立し、群れを作り集団として行動するようになった早い時期から、原初的医療（類似）行為が存在したに違いありません。現在に比べると衣食住に関する生活環境が極めて劣悪・過酷であったでしょうから、自ら、あるいは他の個体の生命維持のため全

知全能を働かせた多要素的なものだったと考
えてもよいでしょう。私が興味を持っている気
功・指圧などは、相手を思いやる手による皮
膚接触 手当て 手かざしの基本技術の名
残と考えるのは考え過ぎでしょうか。現代科学
的技術とは比べものにならないほどの原始的
な技術だったとしても、逆に治してあげたいとい
う思い込みはより強く真摯なものだったかもしれ
ません。古代日本では、八百万神のお力によ
るお助けを祈ったかもしれません。こうした技術
的・宗教的要素に加え、さらに哲学的・倫理
的・芸術的要素を含む、いってみればより人
間くさいものだったと私は想像します。ちなみに、
現代で技術的というと機械的な感じが強いので
すが、語源的には技は手偏（てへん）がつい
ているように人間の手で行う行為のことをさし
ています。概念的には、病めるものを全人的
（ホリスティック）に観る・視る・看ることを基盤
とする行為といえます。

ところが、ヨーロッパでは中世期の十字軍

遠征によるアラブ世界との度重なる接触の結果、航海術 天文学 数学の思考に影響され、ニュートンなどの古典物理学に代表されるように科学的に物事を理解し、判断することが次第に普及しました。科学 (science) 的とは、scissors (鋏) と共通の語源を持つように分析的にものを考え、さらに数 (digital) で分断的に処理することを特徴としています。当然、医療にもこの考えが波及しました。さらに、科学的理念・学説によって基礎が固られて学問としての近代科学的医学が成立したと見ることができます。そこでは、数で理解できない要素は、非科学的として排除されてしまったのでした。

近代科学的医学・医療は次第に発達し、20世紀後半には人間の臓器をパーツと考える人工臓器・臓器移植までもが技術的に可能となり、遺伝子情報までも読み取ることができるようになりました。ところが、これらの医療技術は、本来の性質として個人の生命観・死

生観に干渉する場面に遭遇することもあるようになりました。そこで、できることはなにをしてもいいのかという、ときに科学技術至上主義とも呼ばれる思考・行為に対する反省的な考えが生まれました。医学・医療を科学的にばかりでなく、倫理的・哲学的・社会的などの多様な視座からも評価する考えです。病んだ人間に全人的に対応する考え方といえます。これは、先に述べたようにヨーロッパ社会で、医学・医療が近代科学的に理解される要素のみを取り込んだ時代以前への回帰現象と指摘できます。これが、統合医療の基本的理念であると考えられます。まさかと考えるかも知れませんが、痛めつけ過ぎた地球に対して、環境保全主義が広がりつつある状況と同じ方向に向かうものと評価できます。現代は、癒しを求める時代といわれることがあります。癒しとは、根源的には、神による自然治癒能のことと考えられます。相補・代替・伝統医療と呼ばれる行為は自然治癒能を活性化する具体的

技術を提供する医療の原点とみなされます。